NPO 法人 JSRC

2017 年 9 月 10 日

第 35 号

Jomon Shiba

特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第35号

縄文柴犬の趾行・蹠と爪　五味靖嘉 …… 2
シバの散歩道(34)　根深　誠 …… 5
おたよりコーナー　☆長野県　肥田恵司 …… 8
☆京都府　長井一詩 …… 8
☆広島県　向井亮太 …… 8
☆富山県　杉山春美 …… 8
☆新潟県　高橋幸一 ……10
☆ＭＬ交信から　渡辺義広・五味靖嘉・岡村智鶴・土井下千明・土山仁美
向井亮太・黒梅　明・大岡早苗・栗生隆行・一ノ澤義雄
仲井　茎・藤原庸子・佐々木俊幸・栗原明美
フィラリア対策 …… 10
一日も早く縄文柴犬に会いたい …… 10
農業鑑定？ …… 11
糞を食べる？ …… 11
愛犬の近況レポート …… 15
二度目の作出にチャレンジ・妊娠しました …… 16
噛みついた、、、、 …… 17
テレビに出ました！ …… 17
犬の適度な体重は？ …… 20
犬の熱中症対策は？ …… 20
事務所報告　☆新入会　☆会費　☆仔犬登録　☆寄贈…… 22

お便り募集

会誌を楽しく親しまれるものにするために、皆さんのお便りをお待ちしています。お気軽に原稿をお寄せください。

また、スマートフォンやパソコンでメールをされている方は、メーリングリスト（縄文ひろば）にご参加ください。いつでも気軽にメール交信で全国の会員と意見交流できます。参加ご希望の方は本部もしくは事務局に連絡ください。

◆次号会誌35号発行は2017年12月10日予定。原稿の締め切りは2017年10月20日です。

☆会誌の原稿は、編集事務局（〒920-1302金沢市末町14-60－2　黒梅明 popolo117@fork.ocn.ne.jp）、もしくは会事務所に郵送、又はメールでご送信ください。ぜひ、愛犬の写真も添えてください。

特定非営利活動法人　縄文柴犬研究センター

会事務所：〒014-0073　秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5　☎0187－68－2976
http://www.jomon-shiba.com/　encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp
郵便振替口座：　02280－2－106951

縄文柴犬の趾行・蹠と爪

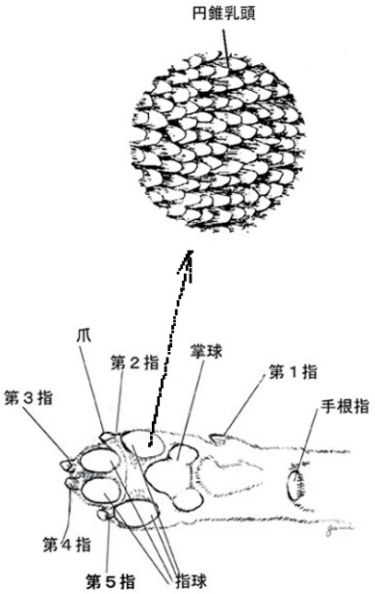
五味靖嘉

はじめに

縄文柴犬の「爪」の話しなどがMLや会誌34号に出ました。この件とは無関係に、私の 2004 年「犬とニホンオオカミの蹠、(所謂、パッド)について」という拙文がある。当時の内容は、故中村一恵氏(注１)　のご教示や小原巌氏(注２)との電話会談が参考になったものである。今回は、その内容と画像を再録し、縄文柴犬の趾行・蹠や爪、狼爪（ろうそう）の話を補充・追加する。

下記の画像は、2004 年当時のものと、会誌№4に掲載されたものである。縄文柴犬の蹠（足の裏）と、狼爪（ロウソウ：第一指、第２図参照）第二指・第三指・第四指・第五指の関係がある。

↓　１図　円錐乳頭



↑　２図　蹠（足の裏）概念図

↓　３図　通常の足

↓　４図　緊張した蹠

↓　５図

左：斜面を登るときは開く。
中：通常の時
右：第３指と第４指がすり減った（白っぽく見える）状態。アスファルトばかりの環境では、ここが板状になる

１－蹠(ｱｼﾉｳﾗ)：パッドについて

縄文柴犬だけとは限らないが、犬の飼育条件が主としてコンクリートやアスファルトの場合の蹠（パッド）と、田んぼや山野を中心の場合とでは、当然のことながら差が出ている。この疑問について「犬がコンクリートや硬い床面のところで飼われる場合、円錐乳頭(第 1 図参照)はときどきすりへって滑らかになるので円錐形の代わりに円形になる。」との一般論がある。この場合はパッドが硬くなり、いわば板状になる。

私が観察したこれまでのパッドでは、コンクリート状のような平らな床面での縄文柴犬の場合、例外なく硬く、ひどい場合にはプラスチックの板状のような状態を観たこともある。そうした、固い板状のパッドに対し、山間部での環境では、殆どが湾曲して盛り上がり温かみを感じ、豊かな弾力性がある。また、趾は力強くありながらも、柔軟性がある。

２－趾（足指）

一方、趾（足指の握り）は固い方が良いとか、様々な考えを散見する。1980 年頃の古い話になるが、実験動物を扱う研究獣医師によると、清掃管理上の合理化で、犬の飼育する床は金網で排泄によって汚れないようにした。ところが、そうした犬たちの趾は全てカエデの葉のように開く、と伺ったのでお願いし早速見学したことがある。

前記、固い床の上では決まったように趾は硬くなる。山野を中心に暮らす犬は、ぬかるみや、草原・急峻な斜面、岩盤、冬期の雪原など、趾を使い分ける。因みに、外国犬種に垂直の岩盤登攀を得意とする犬もいる（後述）。

３－俊敏で音もなく走る（蹠・趾から）

犬たちの山野における行動では、明らかに急峻な地形の登攀を苦手とする場合が見受けられる。その場合の原因としては、前後肢の「趾」「蹠」と「爪」に理由があるのではないか。

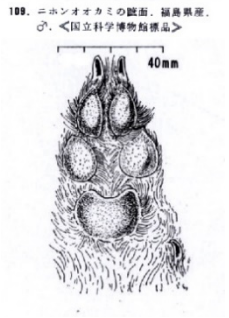
全く同じ環境にあるＡ個体は、音もなく走れるかと思えば、別なＢ個体は音を立てながらでないと走れない、と言う差を挙げることができる。

又、急峻な地形のある里山で、登り・下りを得意とする場合と、全く苦手な個体もある。
前者の趾・蹠・爪は柔軟性があり、後者は、爪も極端に短く蹠は固い傾向がある。

こうした問題は、今後の研究課題として、その重要性が増すと考えられる。

↑ ６図　重力の位置が解りやすい

↑ ７図　第３指と第４指が融合している



↑８図 ニホンオオカミの蹠
神奈川自然誌資料 1990. 11

↑９図 ニホンオオカミの蹠面
（福島産）国立科学博物館標品

４－第三指と第四指は融合している

これまでの私の調査では、第三指と第四指の基部は融合している。（５図・７図）一方、第２指と第３指や、第４指と第５指では基部が分離している。この「融合と分離」と言う形態は、縄文柴犬の殆どに認められる。縄文柴犬の蹠（７図）と、ニホンオオカミの蹠（８図）は、大きさの違いを除けば、爪の状態まで良く相似している。

「地上に印された足跡では指球が連続しているように見えますが、実際に指を開いて見ると案外基部でははっきりと分離しているのが普通ですが、（小原、2000 年口述）」と、質問を受けた。当初、私も苦労し判明した５図・７図は、生体で確認する事が困難であるという主旨を説明したことがある。

縄文柴犬の第三指と第四指の基部が融合することで、趾行の際は、蹠が三点支持の静定し安定した事を意味する。

基部が分離した犬と比較した場合、この第三指と第四指の基部の融合は、四肢の最先端部に重力を移動することで、趾行能力をより高め、より早い動きのとなる。（第６図参照）

基部が分離した一般的な犬の場合と比較すると、この問題は”俊敏で音もなく走る”と言う、縄文柴 犬の重要な特徴につながるかどうか?との研究が重要なテーマになるのではないかと考える。

また、この第三指と第四指の基部の融合は、アフリカなどのサバンナや草原などで暮らす場合とはとは違い、地理的な環境に適応したものとして考えられないだろうか。ご存じの方は、ご教示・或いは情報をお願いする。

５－第一指（狼爪・ろうそう）について

この爪は、他と比較すると鋭利なだけに狩猟や、我が国の地形・群れを維持するなど、自然界との関わりに、大事な意味があると考えている。私の観察では、⑴獲物を取り押さえる際に前肢第２．３．４．５指だけではなく、鋭い狼爪によって獲物の動きを押さえ固定するような役割が観られる。（１０図参照）また、⑵雄は、雌を抱きかかえ交尾する際に、前肢で脇腹を押さえるが、第一指によって固定する。⑶急峻な山野を駆け上がる際（岩盤など）には、この第一指が滑り止を補助する。⑷急峻な山をかけ下る際にこの第一指は、舵取りの補助になる。⑸木登りの際は、横滑りを防ぐ。などが観られた。

記録に寄ると、ノルウェーの古い犬種「ノルウェイジアン・パフィン・ドッグ」がいた。直角の岸壁を登攀し、狭い隙間から獲物であるニシツノメドリの雛を獲るために、第一指が発達し２本となり、指は６本になった。そして、水中に潜ることなど他の犬種では見られない、特殊で柔軟な体躯を獲得した。体高 38cm 前後、体重 7kg 前後の小型犬であり、縄文柴犬の雌とほぼ同じ大きさに該当する。

↓ 第10図　乾燥したイノシシの毛皮を齧っているが、狼爪の先端が刺さるようになっている。前肢左右の趾・爪の使い方に注目

６－縄文柴犬の爪

10 図の左右趾・爪の使い方には、明らかな相違がある。つまり、趾やその爪は、目的によって、柔軟に出し入れをし、狼爪を含めて全ての爪には柔軟な機能性がある。

第一指の親指（狼爪）については、少々乱暴な言い方になるが、犬は人の都合で 700 種余に改良した。それらの犬の多くは、狼爪は無用だと考えるようになった。例えば、狩猟犬などは、狼爪が藪に絡まるので危険・切除とか、室内犬などは狼爪が人体に危険であるといわれ、切除するとか、爪切りをする、などが一般的理解のようである。しかし、ここまで述べたような、重要な役割が縄文柴犬にはある。

７－まとめ

趾行・蹠と爪に関連して、JSRC として考えなければならない、縄文柴犬の原種性や敏捷性についてなどの課題（クマやイノシシ・シカなどの野生動物に対峙する）が存在する。この関連について、ニホンオオカミが生活したと思われる人里近くの急峻な山岳地帯や岩盤地帯では、第三指と第四指の基部が融合し、一体をなす先端部と考えると、前肢は柔軟性を成した「3 本指」とも言える。

この３本指の構成を考えると、単なる俊敏な動きだけではなく、地形的に不利な環境においても、重力は岩盤などの凹凸にも容易に安定し、俊敏で的確な移動を可能にする機能として考えることができる。

また、第一指が充分に機能することは、縄文柴犬の原種性に対する能力がより開花するということが考えられる。そして、縄文柴犬の保存やその社会的な活用の未来をより広く考える必要性も生まれてくる。

ニホンオオカミの蹠（ｱｼﾉｳﾗ）と縄文柴犬の蹠の比較についての、今後の多面的な情報を期待する。

（2009. 8. 1 記・2017. 6. 20）

注１：中村一恵、神奈川県立生命の星・地球博物館学芸部長（当時）、2015 年 11 月 30 日没・会誌 29 号・中村一恵先生へ－感謝を込めて・参照。

※注２：は 21 頁右欄下部に続く

シバの散歩道（34）

根深　誠（文筆家・釣り師・元登山家）

以前、この稿に片足スズメのことを書いたが、それとは異なる片足スズメがこの春先に現れた。前回見かけたのはいつごろだったかと思い、既刊の会誌を調べてみると、2013年9月10日発行の第19号に写真が載っている。

早いもので、あれからすでに四年の歳月が経っていることに驚いた。のけ者にされていたのか、群れから離れ、あとから独りで残り物の餌を啄ばんでいた姿が思い出される。

今回の片足スズメは、前回とは異なり、私が観察できた期間は短かった。冬の間に見かけて雪が消えるころには見かけなくなった。仲間はずれにされていて寒そうにしていることが多かった。気の毒に思っても私にはどうにもならない。

ブナの枝に停まる片足スズメ

たぶん、と私は思うのだが、人間社会とは異なり、仲間はずれとは言っても悪意を持って排除されているのではないのではないか。身体の不具合から仲間についていけなくて仕方なくとり残されているのではないのか。その結果、いつも餌の争奪戦に出遅れて短命に終ったのかも知れない。

現代の私たちの社会では、不具者はいじめの対象になりかねない。よくないことだと思いつつも改善されないのは、本音と建前が社会の二重構造として存在することを示している。誰もが口ではそれらしいことは言っても、誰もがそれを実行するわけではない。

私が体験した範囲で言えば、未開社会では他人をいじめたりするようなことはないようだ。ヒマラヤの奥地にツァルカという村がある。そこは川喜田二郎著『鳥葬の国』の舞台であり、現在でも徒歩で行くしかない辺境の村である。しかも途中、五千数百メートルの峠を二つか三つ越えねばならない。人口七百人余り。

私はその村を何度か訪れ、民家に寝起きし、人びとの世話になった。それが機縁で、村びとたちと心をひとつにして三年がかりで鉄橋を建設したことがあった。これについては『ヒマラヤにかける橋』(みすず書房)という本を書き、ドキュメンタリー映画を製作したこともある。

このツァルカ村には六本指の人たちがずいぶんいた。それでも何の偏見や差別を受けることなく、それが当たり前のように生活していた。急ぎ足で結論を述べれば、貨幣経済から遠くかけ離れた、電気さえも通っていない半農半牧の自給自足型の生活が、貧富の格差のない平等社会を築き上げているのだと考えた次第である。

話題が横道に逸れたので本筋に戻そう。

片足スズメがいなくなってから、今度は散歩コースを歩いているとき片足カルガモを見かけた。スズメより図体がでかいだけに歩くのもたいへんだろうし、とくに片足しかない水かきでは、泳ぐのは不自由極まりないのではないか。

住宅地の下方を流れる土淵川という用水路に沿って延びる「サイクリングロード」で見かけたのだが、一羽、農業用と思われるちいさな堰堤の縁に立っていた。三面護岸が施され、川の態をなしていないので用水路と呼ぶしかない。しかし、その用水路の中にも、場所によってはアブラハヤの群れがいるので、それが餌になっているのだろう。

用水路の堰で佇む片足カルガモ

※　※　※

土淵川の源流にある久渡寺山が新緑に覆われ、残雪もだいぶ少なくなったころ、ひさしぶりでシバといっしょに登ってみようと考えた。しかし、その前に、体力的に自信が持てないのでひとりで下見に出かけた。

土淵川沿いに延びる「サイクリングロード」の終点に久渡寺山の登山口がある。わが家から5キロほどだ。五月上旬の好天気に恵まれた日で、生気はつらつとした青空に、草木の緑が萌え盛っていた。

老いて萎びてきた私の心身に、自然界の命の輝きが伝わってくる。その快いありがたみがわかるようになり、一抹の寂しさを伴った感謝の念が湧き起こる。暑くもない寒くもない柔らかな陽射しに広がっていた。

登山道の脇に群生するカタクリ

若い男女のグループが雑談し、笑い声を上げながら自転車で私を追い抜いていく。登り坂であり、それをものともしない元気のよさは大したものだ。

若者たちは久渡寺で、なにやら境内を見学していたようで、私が登山道の脇で腰を下ろして小休止していたとき、相変わらず歓声を上げながら元気な足取りで追いついて来た。

「こんにちは、なかなか威勢がいいね、中学生かね」

私は老人らしく落ち着き払った態度で聞いた。

若者は一行五人。男子二人、女子三人。活力溢れる歯切れのいい答えが返ってきた。

「大学生です」

これを聞いて、私は仰天した。

「若いねーッ、元気あるねーッ。それにくらべて私は七十歳、この白髪頭、バテたよ」

「おじさんも若いですよ。七十歳には見えませんね」

「若いのに、なかなか言うね。感心するね」

聞くと、五人とも県外出身者だ。

私が休んでいる場所には、道脇にいちめんカタクリが咲いていた。

「いまがちょうど見ごろだな。久渡寺山は今年はじめてなのでちょうどよかった。カタクリを知っているでしょ」

「名前は知っていたけど、こうして間近に見るのははじめてです。久渡寺山もはじめてです」

「この先、そこに残雪の急斜面があるので、滑ったりしないように気をつけて行ってくださいね」

「ありがとうございます。おじさんも気をつけて」

私はひとりになってヘボタンを詠み、ヘボスケッチをした。ヘボタンというのは短歌、ヘボスケッチはスケッチのこと。ヘボはヘタクソの意味。

カタクリを描いたスケッチ

下むきに蕊を伸ばしてそり返る雪消の堅香子花のかずかず

残雪の急斜面には階段状に足跡が残っていて、それをたどれば何なく登れそうに思えるのだが、慣れない人たちには危険を感じさせるようで、何人もの先行者が並んでいた。七、八年前の、シバが満四歳を迎えた二月下旬、シバを先頭に立たせてラッセルしながら、この斜面を登ったことがあった(2010 年 5 月 15 日発行「会報」第 6 号)。思い出すにつけ、あのころはシバも私も、いまよりはだいぶ体力があったようだ。

私は残雪の急斜面の基部で運動靴からスパイク付の長靴に履き替えて登った。家を出て、ちょうど三時間で山頂に着いた。いい運動になる。山頂ではブナ林が芽吹きはじめ、十人余りの先行者が休んでいた。

私は昼食を済ませ、下山の途につく。登る途中の、長靴に履き替えた、残雪の急斜面を下り切った地点で長靴から運動靴に履き替えた。たったそれだけのことで足取りが軽快になった。

カタクリが群生している場所で、腰を屈めて熱心に花を観察している婆さんがいた。なかなか立派な態度だと内心褒め称えながら見ると、顔見知りの山好きな婆さんだった。八十近いのに驚くほど達者で山歩きを続けていた。

「あら、先生ですか。お久しぶりです」

三十年ほど前、ＮＨＫ弘前放送局の文化センターで登山教室の講師をしていたころ、その婆さんは受講者のひとりだった。それで私を先生と呼んだのだろうが、照れ臭くて、思わず顔が歪んでしまう。婆さんは斜面に這いつくばるような姿勢で写真を撮っていた。

私は婆さんに挨拶して一足先に下った。久渡寺山には毎年秋、私が中心になってブナの苗木を植樹しているので、その苗木の生育状態を確認したのち登山口に下った。登山口の売店で缶ビールを買って喉を潤す。

※　　※　　※

毎年、田植えのころカッコウが啼きはじめる。田園風景の広がりに響き渡る通りのいいその音色は、初夏の爽やかさと相俟って印象深いものがある。今年はじめて耳にしたのは五月十二日、朝の散歩のときだった。

「ああ、今年もカッコウの啼くころになったな。いい声だな」

私はシバに話しかける。もちろん、話の内容がわかるわけでもないだろうが、以前は話し掛けられると私の顔を見たものだった。それが最近、見向きもしなくなったのは、老化で耳が遠くなったからなのだと思う。何かと反応が鈍くなっている。

毎年、カッコウの啼き声を聴いた日はメモしてあるので帰宅後、調べると、去年は二十日だった。今年は八日早いことになる。しかし一方、啼き声を聴かれなくなるのはいつなのかメモしていないので、こちらの方はくらべようがない。今夏にかぎっては、七月中ばになっても聴こえてくるので気にかかる。

啼く時間帯も早いようだ。日の出前の暗いうちから啼いている。その啼き声に合わせているのかどうか、そのあたりの事情は知る由もないが、カッコウの啼き声が私の耳に届く前後にシバの散歩を催促する、クンクンという声がねちっこく聴こえてくる。吠え立てられては近所迷惑になるので、とりあえず玄関先の土間にカーペットを敷いて入れるのだが、しばらくするとわめき出すので散歩するほかない。

月が煌々と照り、明けの明星がひときわ輝いて中空にかかっている。七月下旬、ニイニイゼミが啼くころになってもカッコウは啼いている。

カッコウのいつまで啼くやら七月のニイニイゼミの声聴く朝に

庭に降り立つキジバト

暑い日が続き、わが家のちいさな庭には餌づけされたスズメの群れや、シバの食べ残しを狙うカラスやキジバトが来るのだが、最近、カタツムリが姿を見せるようになった。シバの食事の容器にへばりつき、シバが餌を食べようと容器に顔を突っ込むと逃げ出す。何年か前、山で見つけたカタツムリを持ってきて庭に放したことがあるので、あるいはその子孫なのかもしれない。ナメクジはときどき見かけることがあったが、カタツムリがシバの餌に寄りついているのを見るのははじめてだった。

シバの餌を食べに来るカタツムリ

ＪＳＲＣ諸料金一覧

会　費	・	入　会　金	1,000 円
	・	年　会　費	5,000 円
登録料	・	血統書発行　一頭	1,500 円
	・	犬　舎　名	2,000 円
	・	登録再発行　一頭	1,000 円
	・	単　独　犬	2,000 円

血統登録について

①．仔犬が生まれた方は御一報下さい（用紙送付します）

②．申し込みには登録料が必要です。

③．血統登録、犬舎名登録は五文字以内で、漢字には必ずふりがなを付けること。

④．両親犬のカラー写真（5×6 ㎝以上）を添付。

⑤．二週間以内に、カラー印刷で発行しております。